

書評 Benedict Anderson, The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World

| | |
|-----|--|
| 著者 | 藤原 帰一 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジア経済 |
| 巻 | 42 |
| 号 | 7 |
| ページ | 69-72 |
| 発行年 | 2001-07 |
| 出版者 | 日本貿易振興会アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00007981 |

Benedict Anderson,

The Spectre of Comparisons: Nationalism, South-east Asia, and the World.

London & New York: Verso, 1998.
x + 374pp.

藤原 帰一

I

ベネディクト・アンダーソンの文章には、方法といえるものがない。散歩に出かけたら手頃な棒が見つかった、そういうかのように、好き勝手に手を伸ばして、史実や文章、あるいは日常茶飯の瑣事を拾い出し、そこから大きな絵を描いてみせる。厳密な定義を経た専門用語や、分業化の進んだ学術研究の体制などには、まったくとらわれていない。

そして、約束ごとに縛られた学者の仕事よりも、はるかに魅力的な文章を紡ぎだしてしまうのがアンダーソンの真髄だろう。誰もが使うのに、もう意味などは忘れてしまったような言葉、たとえば言語と政治、ナショナリズムと現代、都市化と政治意識、そんな手垢にまみれた概念や用語が、まるでピノキオのように起きあがって、はっきりした顔を見せるのである。

プロフェッショナルな学者にとって、これは悪夢のような相手だ——だって、まるでぼくらが馬鹿みたいじゃないか。しかし、読者として言えば、思想家としか呼びようのないこの知識人の思惟によって、頭の霧が吹き飛ばされ、枯れた水路に水が蘇るような思いをするに違いない。これは、そんな文章を詰め合わせた、アンダーソンの菓子箱のような本である。

II

アンダーソンの仕事は、インドネシア政治の研究に始まり、『革命期のジャワ』(*Java in a Time of Revolution*, 1992)をはじめとする作品に実を結んだが、それを広げるきっかけになったのが『想像の共同体』(*Imagined Communities*, 1983)だった。ナショナリズムという対象を得て、それまでにたまっていた好奇心が、世界史の中へ吹き出した、という風だった。『想像の共同体』の刊行後に、アンダーソンの関心はさらに広がっていく。本書は、その関心の広がった時期、つまり『想像の共同体』第1版と改訂版刊行の間に、東南アジア政治について書かれた文章を主として構成されている。本書の構成は以下の通りである。

第1部 ナショナリズムの長い円弧

第1章 ナショナリズム・アイデンティティ・そして逐次配列の論理

第2章 複製・霊気・後期ナショナリズムの想像

第3章 遠隔地ナショナリズム

第2部 東南アジア——各国研究——

第4章 闇のとき・光のとき

第5章 玄人の夢

第6章 ジャカルタの靴のなかの小石

第7章 撤退の兆候

第8章 近代シャムにおける殺人と進歩

第9章 フィリピンのカシケ民主主義

第10章 最初のフィリピン人

第11章 想像もできないこと

第3部 東南アジア——比較研究——

第12章 東南アジアにおける選挙

第13章 コミュニズム後の時代の進歩主義

第14章 みんなが逃げてゆく

第15章 多数派と少数派

第4部 何が残るのか

第16章 運のない国

第17章 諸国民の美德

全体には、2つの流れがある。そのひとつは、『想像の共同体』から発展したナショナリズム論の流れであり、特に第1部と第2部に収められた5論文がそれに当たる。

これらは、『想像の共同体』を書いた後に気づいた旋律を奏でる、エチュードのような小文だ。たとえば、『想像の共同体』のなかでは、ナショナリズムの展開と資本主義との関わりは、一部しか議論されていない。そこでは、出版資本主義という、それ自身は魅力的な観念によって、出版の進展と資本主義が並べて議論されている——よい切り口には違いないが、資本主義も市場も出版や情報だけで捉えるわけにはいかない。モノ、カネ、ヒトの国際的移動は、ナショナリズムとどのように関わるのか。この、前著で取り残された問題に取り組むのが、本書第3論文における「遠隔地ナショナリズム」の議論であり、「故郷」から離れた人々、いうところのディアスポラによって構想されたナショナリズムとその急進化が議論されている。『想像の共同体』には無名戦士の墓の特異性を論じた印象的なくだりがあるが、その数小節が、ここでは記念碑、祈念碑や墓地を手がかりとする第2論文のなかで全面的に開花する。人口統計を論じた第1論文のように、『想像の共同体』増補版に盛り込まれる論点の試し書きのようなものもある。アンダーソンの工房が一般に公開されたようなものだ。

第2の流れは、東南アジア各国政治を論じた第2部と第3部の論文であり、ことにタイの学生革命(1973年)とフィリピンの黄色い革命(86年)という2つの激動に刺激された、タイ政治論とフィリピン政治論が面白い。もっとも、何が面白いのか、案外はつきりしない。アンダーソンの議論を要約するのは、焼き魚を解剖図に置き換えるように空しいことだからである。どの論文でも、議論の本筋は取り立てて「新しい」とはいえない。それどころか、いくつかの論文は、書き方は巧みでも、秀才の作文のようだ。第8論文のように、タイの都市化、中間層の拡大、さらに官僚資本とは異なるビジネスセクターの拡大がチャーチャイ政権の下の政治的暴力を生み出したといわれても、だからどうした、知れたことだとし

か思えない。アンダーソンの本領は、陳腐な議論でも読ませてしまう、その構成力と議論の組み立て、そして言葉遣いであり、それらを通じて古びた観念に息を吹きこむのである。

たとえば、インドネシアのナショナリズムを考える際に、ストモを、スカルノやハッタと対照させるぐらいは、誰でも思いつきそうなことだ。ナショナリズムを捉える観念として、インドネシア・ムリア(麗しのインドネシア)とムルデカ(独立、自由)を採り上げるのも、陳腐なぐらい当たり前だろう。ところがアンダーソンは、本書第4論文で、ストモの自伝をゆっくりゆっくり読み解き、若いストモがどのような人格に惹かれ、どのように自己形成を遂げてきたのか、丹念に追いかける。この極端に緩やかな展開から、ストモのインドネシア・ムリアの夢を持ってきて、それまでの記述がインドネシア・ムリアを支える人間像であり、風景であったことを読者に飲み込ませてしまう。ここまで来れば、アンダーソンの言葉を待たなくても、ストモの夢見るインドネシアと、スカルノやハッタたちのムルデカの夢との対照は、読者が自ら描いてしまうだろう。概念を並べる前に、その概念を生んだ瑣事や風物を伝え、読者をつかまえてしまうのである。

このマジックを支えるのがアンダーソンの文体である。学術研究の方法や手続きはないものの、アンダーソンは言葉にはごく細かい。ニュアンスに細心の注意を払い、何か国語も駆使し、原文がインドネシア語でもスペイン語でも、自分で訳してしまうこの学者は、たとえば第11論文では、『ノリ・メ・タンヘレ』英訳のまちがいを指摘するばかりか、間違え方の検討を通して、フィリピン・ナショナリズムの変化を掘り起こしてしまう。

読むだけで楽しくなるところも多い。たとえば、第9論文の、マルコス体制を捉えたくだりである。

いってみれば、ドン・フェルディナンドは、これまでの秩序に潜んでいた破滅的論理を、その極限まで押し詰めた、カシケや軍閥の親分みたいなものだった。何十もの民間「警備員」を雇う代わりに、国家警察を私物化してしまった。私兵の代わ

りに、国軍が私兵になった。判事をいうなりにする代わりに、最高裁を子分につけた。そして、地方の金権政治や腐敗選挙区の代わりに、政商やヤクザや茶坊主を使って、国をまるごと、腐った金づるにしてしまった (p. 213)。

このすぐ後に、マルコスは「マニラのルイ・ナボレオン」という称号を与えられる。マルコス体制をポナバルティズムにたとえるという、まるで当たり前の分析が、手品のように生き返るのである。

言葉には、落とし穴もある。アンダーソンは、気に入った言い回しを思いつくと、それがどれほどの悪ふざけでも、試さずにいられない。ところによっては言葉にあわせて現実が書き換えられ、誇張に陥るところも出てくる。第15論文では、「大英帝国最後の大たたき売り」がマレーシアを生み出したという。なるほどとも思うが、英領マラヤが自治を得た後も、英領植民地の独立はその後20年以上も続いた。「大たたき売り」という形容は面白すぎるだろう。

また、不必要に残酷な表現が議論を弱めることもある。第10論文では、アメリカ統治の開始によって、フィリピンからスペイン統治の遺制が、生活習慣から言語に至るまで追い払われていったことを、「ロボットミー」と表現している。単純化どころではない。たとえばニック・ホアキンが、その『フィリピン人としての芸術家の肖像』で描いたような、過ぎ去ったスペイン文化への郷愁と、その醇風美俗の息苦しさ、また新参者の帝国への反撥と、そのアメリカの象徴する、抗いえない現在への悲しい順応、そんなさまざまに彩られた屈折が、「ロボットミー」というサディスティックな形容によって、外科的に切り取られてしまう。アンダーソンの文章が心地よく耳にはいるほど、読者は眉につばを付けることになる。

III

さて、この本は何を書いているのか。それは、アンダーソンという知性の成り立ちを考えることと重なってしまう。本書の書名、「比較という妖怪」は、リサールの言葉から選ばれている。フィリピンを離

れてスペインに学んだリサールは、外国で見るもの聞くものごとごとくをフィリピンと比べずにいられず、外国暮らしを続けるほどにフィリピンを意識する。何でも「フィリピン」と比べてしまう自分を、リサールは、「比較という妖怪」とりつかれているといった。ここでの比較は、それと比べる「自己」の意識、つまりナショナリズムの起源として考えられている。

ナショナリズムに関する論文を並べ、また東南アジア各国を比べた論文を集めた本の題としては確かに気が利いている。だが、その意味は、著者の考える以上に現実を模倣しているかも知れない。

リサールには戻るところがあった。帰国して、スペイン人によって殺される運命にあったとはいえ、そこに帰り、ともに気持ちを通わせる戻るべき「くに」を、リサールは持っていた。その「くに」の安心は、アンダーソンにはない。アイルランド人として大英帝国と隔たったところから出発したアンダーソンは、教育を受けた大英帝国を自分の意志で放棄する。アメリカで学び、住み、働きながら、アメリカ政府の外交政策はもちろん、アメリカ社会への適応も拒絶する。そして、インドネシアの人々と自然にこよなく惹かれながら、九・三〇事件の内幕を暴露した文書のために、スハルト政権から入国を拒まれ続けた。リサールにとって、比較の片方は常にフィリピンに決まっていたが、アンダーソンの場合はアイルランドでも、イギリスでも、アメリカでも、インドネシアでもない。この永遠の亡命者は、ナショナリズムを語りながら自分の「くに」といえるものは持っていない。

礎を降ろすところがないために、アンダーソンの行う比較は、定点のない、止めどもない相対化を生み出してしまふ。それはリサールとも比較にならないほどの知性の妖怪である。それでは、アンダーソンのよりどころとなる価値や秩序は、どこにあるのだろうか。

ひとつには、彼の忌み嫌う、大英帝国の落とし子という出自がある。膨大な海外領土を抱えることによって、大英帝国は、その海外領土の人と文化に心酔する人々と、帝国支配に抵抗する知性の2つを生

み出した。イギリス社会の閉塞を嫌ったジョージ・オーウェルがビルマ勤務を志願するように、大英帝国の傲慢を嫌ったアンダーソンはインドネシア研究に没入する。T・E・ロレンスのような無邪気なオリエンタリズムと帝国主義の結合は過去のものとなつてはいたが、アンダーソンの出発点は、帝国のオリエンタリズムの系譜のなかに位置づけられる。

さて、海外領土への知的関心は、イギリス本国では衰えた。フォスターは過去の作家となり、オーウェルもビルマから、バリとカタロニアを経て、もっぱらイギリスについて語る人となってゆく。戦後イギリスでは、ナイポールやラシュディーのような、海外領土出身のエミグレによって帝国への自己愛を確保するというところまで、「海外」への関心は衰えて行く。そのなかで、アンダーソンは、遅れてきたオリエンタリストだった。イギリスとアメリカの帝国支配を呪いつつ、帝国があればこそ世界各地への知見も生まれたという仕掛けは、オリエンタリズムの構造そのものである。そして、かつてのオリエンタリストとは異なり、「イギリスやアメリカではない世界」への希望的観測によって目を曇らせることは彼の知性にはできない。公平といえば公平だが、東にも西にも組みすることのできない、身の置き所のないつらい視点しか残されない。

「くに」のないアンダーソンの心情を探るときに、2つの文章が手がかりを与えてくれる。ひとつは、東南アジアにおける急進思想を論じた第13論文である。インドネシアとタイにおける Kommunismus の生涯と時代を論じながら、その視点はことのほか優しい。他方、第14論文では、1997年の通貨危機以後の東南アジアの混迷が、悲しみよりは喜びと共に語られている。

変だ、と思う人がいるかも知れない。東南アジア共産主義は、果たして未来に希望を与える思想や運動だったのだろうか。また、通貨危機以後の経済逼迫が招いた貧困を前にしながら、それを変化の引き金

として歓迎する学者は、いったいどんな人なのか。だが、アンダーソンは、遅れてきたオリエンタリストであると同時に、遅れてきた社会主義者でもあった。『想像の共同体』の冒頭を思い浮かべればよくわかるだろう。そこでは、カンボジア・ベトナム、ベトナム・中国という社会主義国相互の戦争が衝撃と共に語られ、いまなおナショナリズムを語るべき根拠として検討されている。これは、社会主義国はお互いに戦わないという希望的観測に、一時ではあれ犯された人間でなければ思いつかない議論である。アンダーソンを東南アジアに引きつけたのは、「イギリスでもアメリカでもない」オリエントへの好奇心と並び、ヨーロッパではもはや見られなくなった社会主義が、まだ可能性として残されている、変動期の社会への関心だったといえるだろう。

アンダーソンは、遅れてきたオリエンタリストであり、遅れてきた社会主義者だった。かつての英国紳士のオリエンタリズムを信じるほどの偽善と虚栄には恵まれず、さりとて Kommunismus の運動に没入するほど自分をだますこともできない、この、まことに中途半端なところに追い込まれた著者は、しかし確実にオリエンタリストの末裔であり、イギリス社会主義知識人の末裔なのである。そして、オリエンタリズムと社会主義のどちらもが、すでに時代錯誤以上のものでなくなった現在、アンダーソンの見事な文章は、そのペダグギックな文人趣味とともに、ほとんどノスタルジーさえ感じさせる、かつて失った思惟の記憶となる。

そのどれもが、むかし聞いた歌に過ぎない。だが、ちょうどスペイン時代のフィリピンの名残や、蘭領時代の麗しのインドネシアの名残のように、ちょうどナショナリズムが建国の夢と結びついていたときのように、アンダーソンの言葉は、昔の歌だけに残された美しさをたたえている。

(東京大学大学院法学政治学研究科教授)